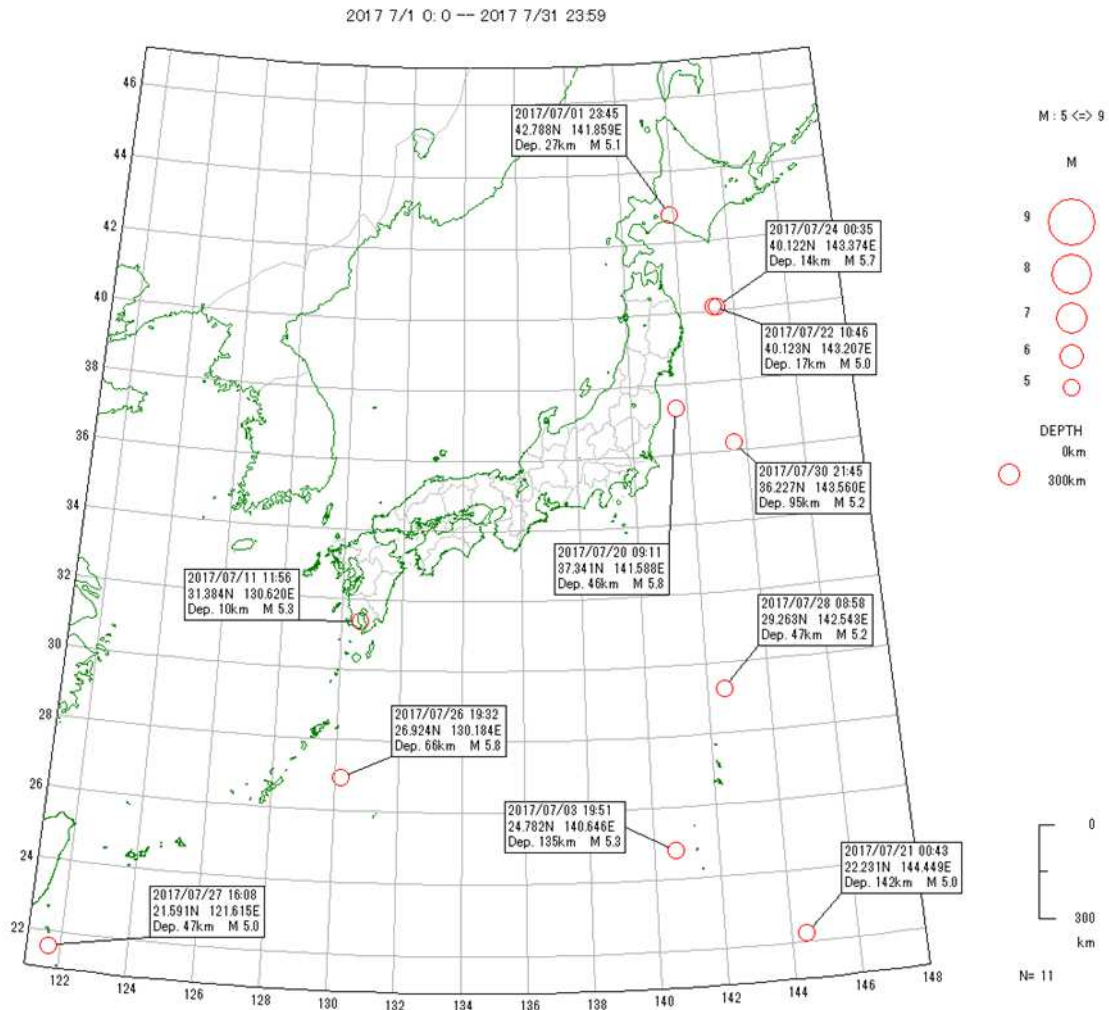


**2017年7月の地震活動概観**

7月に日本列島およびその周辺で発生した地震のうち、マグニチュード5を超える地震は11個発生しました。6月は6個、5月は9個、4月は7個、3月、2月はいずれも5個でした。7月は少し活発な地震活動であったと言えます。

期間中では7月20日に福島県沖、26日に南西諸島で発生したマグニチュード5.8の地震が最大の地震でした。

**8月2日に茨城県北部で発生した地震**

2日午前2時ごろ、茨城県の北部を震源とするマグニチュード5.5の地震が発生し、最大震度4を記録しました。この地震は2011年4月11日に福島県南部で発生したマグニチュード7.0の地震の余震です。この地震は福島県浜通り地震と名付けられました。

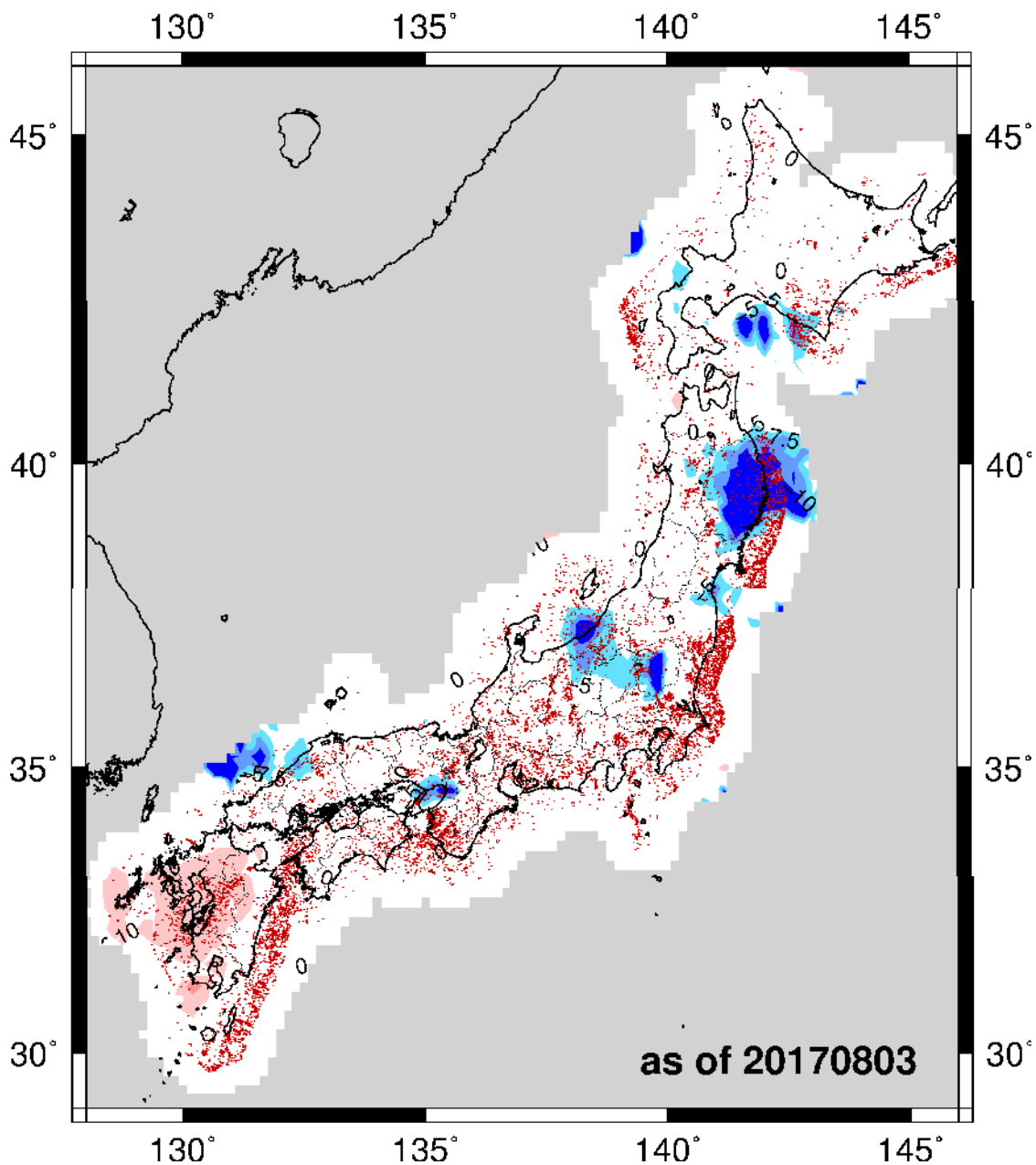
なぜこの地震をここで取り上げたかと言いますと、実はこの4月11日の地震というのは、311（東日本大震災）の直後であったため、あまり大きな報道はなされませんでした。地震学的には（特に電力会社にとって）極めて深刻な地震だったのです。これは電力会社によりそれまで活断層ではないと判断されていた井戸沢断層・湯ノ岳断層という断層系が活動したのです。



この断層系は電力会社の（3 1 1 前の）調査では「活断層の可能性は低い」と判断されていました。しかし3 1 1後に改めて調査してみると、およそ15,000年前には活動していた事が確認されました。つまり原発設置のための活断層調査というものが完全ではないという事を地震発生の事実をもって証明してしまったのです。

## 日本列島陸域の地下天気図®

これまでのニュースレターで、日本列島陸域については、北信越地方、瀬戸内海を含む中国地方西部、そして岩手県を中心とした地震活動静穏化の異常が顕著な異常として認識できるという事を報告してまいりました。前回のニュースレター（6月19日付）から1ヶ月半ほどが経過しましたが、北信越地域の異常は形も変わり、異常は若干収束の方向に向かっています。また中国地方・瀬戸内海地域の異常はほぼ消失している事がわかりました。



8月3日時点の陸域の地下天気図



地下天気図解析では、これまでの経験則として、「異常が消えてから地震が発生する可能性が高い」という事がわかっています。また地下天気図では、これも経験則ですが、異常の中心で地震が発生するより、(異常が最大となった時の) 異常の周辺部で地震の発生する可能性も大きい事がわかっています。

岩手県を中心とする異常はまだ継続しており、こちらは発生するとしてもまだ先の可能性が高いと考えています。

参考：前回の解析の6月17日時点の地下天気図

